

「関心持ち続けて」

琉球病院の ケアチーム 被災者の傷語る

【金武】3月22日から4月3日まで、岩手県宮古市で被災者の心のケアに当たった琉球病院(金武町)の村上優院長(61)ら3人が、4日帰沖し、被災者の心の傷について語った。村上院長は「原発のニュースが中心になり『忘れられてしまった』と感じる被災者も多い。関心を持ち続けてほしい」と訴えた。



国立病院機構の打診を受

「被災地に関心を持ち続けて」と語る(左から)野村れいかさん、村上優さん、仲間正弘さん
114日、金武町の琉球病院

け、琉球病院は菊池病院(熊本県)と合同で宮古市内のケアに当たった。琉球病院からは村上院長のほか、看護師の仲間正弘さん(43)と臨床心理士の野村れいかさん(35)が参加。20カ所の避難所をそれぞれ2日に1度巡回した。

宮古市の犠牲者は1日現在、死者369人、行方不明者1301人。行方不明者の多さが東日本大震災の特徴だ。

チームが避難所を訪ねると子どもたちが集まってくる。「いつまでいるの」。先の見えない不安から、中学生でも幼児のように離れようとしないう。一緒に遊んでも、「ゲームが流された」と津波を思い出してしまふ。心の傷は深かった。

村上院長らは3日、合同チームの第2陣に業務を引き継いだ。村上院長は「集団を離れた人が強い孤独を感じる」ことがあり、今後は在宅訪問が必要になる。中長期的な支援が必要だ」と強調した。